委　員　会　行　政　調　査　報　告　書

令和４年１１月７日

尾張旭市議会議長　殿

福祉文教委員長
櫻　井　直　樹

本委員会は所管事務調査のため下記のとおり行政調査を行いましたので、報告します。

期日等	期　　日	調　　査　　先
	令和４年１０月３１日	岡崎市立美川中学校
参加者	計　６　名	
	櫻井直樹、安田吉宏、芦原美佳子、陣矢幸司、花井守行、若杉たかし	
調査項目及び内容	「校内フリースクール　Ｆ組」について	
	１「Ｆ組」が設置されるようになった経緯について	
	２「Ｆ組」の理念について	
	３ 担当教職員、勤務時間、予算などの体制について	
	４ 実際の取り組みについて	
	５ 成果と課題について	
	６ 行政調査の成果	
	（行政調査の成果等は別紙にて報告）	
その他	参考資料は別添のとおり	

福祉文教委員会行政調査報告書

委員長 櫻 井 直 樹

令和４年 10 月 31 日に、岡崎市立美川中学校を訪問し、不登校の子どもたちの対応策として実施されている、校内フリースクール「Ｆ組」について行政調査を行った。

１「Ｆ組」が設置されるようになった経緯について

全国的に不登校児童生徒の増加が問題視されており、岡崎市においても大きな課題であった。教育長の教育理念が、「すべての子どもに光を充てる」ということから、何らかの事情で学校や教室に来られなくなった児童生徒に対して、誰一人取り残すことなく個別最適化された学びの場を保障し、多様な教育機会を確保すると共に、生徒が社会的自立に向かって歩き出すことができるようにしたいという願いから、校内フリースクールが設置された。

令和２年度の設置当初は、中学校３校の設置から始まった。令和３年度には、新たに中学校５校に設置され、令和４年度には、さらに中学校６校に設置され、現在は、市内中学校 20 校中、14 校に設置されている。

２「Ｆ組」の理念について

「Ｆ組」を通常学級と同じ一つの学級として扱い、信頼の厚いミドルリーダー的な教師を担任とし、合わせていつでも温かく迎える支援員を配置する。教室環境は、ソファーを置いたり、ひょうたん型のテーブルを設置したり、柔らかいイメージを持つような空間づくりに配慮する。

「Ｆ組」の理念は、魅力ある学校づくりに繋がる校内フリースクール「Ｆ組」という考え方である。従来の適応指導教室は、在籍学級に対して一段落ちるというイメージがあり、在籍学級との間に段差が生まれ、自己肯定感の喪失に繋がっていた。しかし、「Ｆ組」は、在籍学級と同列な一つ学級なので段差がなく、好きな授業のときに、いつでも在籍学級に行くことができる。また、「Ｆ組」の生徒が在籍学級に戻ることで、学級担任の意識も変化し、在籍学級自体に「みんな違って、みんないい」という雰囲気が生まれ、学校が楽しいという「魅力ある学校」につながる。

これが、校内フリースクール「Ｆ組」の理念である。

さらに、不登校を未然に防ぐという要素もあり、校長が教職員や全校生徒、保護者、地域に対して、「Ｆ組理念」を機会があるたびに語るようにしている。

３　担当教職員、勤務時間、予算などの体制について

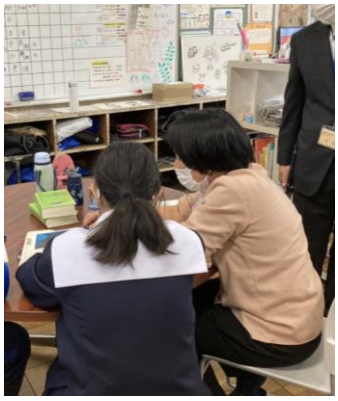
Ｆ組には、特別な加配教員がいるわけではなく、現有教職員の定員数内で運営を行っている。そのため、Ｆ組の担任は、普通の数学の教師であり、他の数学教師の協力を得ながら、数学の授業時間数を９時間におさえ、Ｆ組にいる時間をできるだけ増やしている。

その代わり、Ｆ組に常に常駐している支援員を会計年度任用職員として雇用している。支援員の勤務は、１日５時間、週５日、年間２００日の勤務形態である。

Ｆ組の運営予算としては、支援員の人件費と環境整備のための備品購入費のみである。

4　実際の取り組みについて

「Ｆ組」の教室に入り、実際に５時間目の授業の様子を見させていただいた。



６名の生徒が教室内にいる。iPad を使って、通常学級の授業に参加している生徒。支援員と共に、英語の絵本を読解している生徒。パソコンで、オリジナル曲を作曲している生徒。ソファーに座り、担任教師とオセロを楽しむ生徒。

驚きの授業風景である。６人の生徒が、一斉授業を受けているわけではなく、まったく自由である。それは、１日の活動内容や時間割を生徒一人一人が決めているからである。

教室の背面黒板には、生徒一人一人の日課が記入されていた。生徒が一人少ないことを尋ねると、「在籍学級で授業を受けている。」ということであった。

生徒たちの表情は、とても明るく、楽しそうで、見知らぬ人達が授業中にいても、何も臆することなく、平常心である。気軽に私たちに話し掛けてくる生徒もいる。とても、心に何かを抱えている不登校生徒とは思えない表情である。なぜ、このような表情ができるのだろうか。このような子どもらしい生徒たちの表情が、校内フリースクール「Ｆ組」の成果を現していると考える。

5　成果と課題について

岡崎市では、長期欠席者が増加傾向にある中で、Ｆ組新設校５校中の内２校が減少傾向にある。

校内フリースクールには、今までの「学校」という場所にはなかった優しい、穏やかな空気感があり、それが生徒の安心感となり、「居場所」になっている。また、校内フリースクールは、学校内にあるので、特別教室を利用することができ、技能教科を学ぶ機会や自分の興味のあることを行う時間も設定し、自分の「強み」や「やりたいこと」を探すことができる。

さらに、国語や数学等の学習は、これまでの学び直しや基礎固めを行い、学習に対する自信をつけていくと共に、iPad により、Ｆ組にいながら、中学３年生が１年生の授業に参加することもできる。様々な活動を通して、「自己肯定感」を高めている。しかし、いくら環境を整備しても、在籍学級との段差意識は、簡単にはなくならない。「みんなが受ける授業を受けずに楽をしている。」、「遊んでばかりいる。」と捉える教員、生徒、保護者は、少なからずいる。

課題としては、「理念の浸透」である。そのために、特に大切なのが、「校長による理念の浸透」であり、在籍校長の手腕が鍵になる。入学式の式辞や保護者会、「校長室だより」、Ｆ組懇談会など、機会があるたびに、Ｆ組設置の趣旨や理念を伝えているが、市内のＦ組設置校の中でも差が出てしまうところが現実である。今後は、教師の研修も充実させていき、Ｆ組理念を浸透させる。

6　行政調査の成果

今回の行政調査は、実際に中学校現場で校内フリースクールの実態を視察し、不登校生徒たちの生き生きとした姿を見ることができ、とても感慨深いものがあった。市の状況に違いはあるが、本市における、今後の不登校児童生徒の対応を検討する上で、とても参考になった。